ＥＵにおける中国系第二世代のアイデンティティ
―イギリスとフランスの比較から―

山　本　須美子

はじめに

現在のEU主要国であるイギリスやフランスやドイツは，第二次大戦後の産業復興のために多くの外国人労働者を受け入れた。1970年代の経済不況によって，各国は外国人労働者の受け入れを制限し，また多くの外国人労働者が家族を呼び寄せ定住の途を選んだことによって，現在，移民の若い世代の大多数は，移住先で生まれ育っている。本論は，イギリスとフランスにおいて生まれ育った中国系第二世代が，親の背景にある文化と主流社会の文化との境界でどのようにアイデンティティを形成しているのかを比較考察することを目的とする。

EUにおける移民の子どもは，1970年代頃までは，多くが出身国で生まれ，親の移住によってそれまでの生育環境を離れ，移住先の学校に流入していた。それゆえ，移民の子どもの教育をめぐる問題は，主流社会の言語能力不足や，適応困難，学力不振等であった。しかし，第一世代が定住の途を選び，1980年代半ばから移民の若い世代がほとんど移住先で生まれ育つようになることによって，移民の子どもの教育をめぐる問題は変化してきた。言語能力不足や適応困難という問題は減少し，低学力問題は依然一部に残るものの，親の背景にある文化と主流社会の文化との間で成長をすることによる親子の葛藤やアイデンティティの危機，しいては主流社会で生まれ育ちながら主流社会の一員としての意識を持てないという問題がクローズアップされるようになった。本論は，イギリスとフランスにおける中国系第二世代へのインタビュー調査に基づいて，中国系第二世代が二つの文化の境界でどのようにアイデンティティ形成をしているのかを比較検討する。そして，それを通して移住先で生まれ育った若い世代が，どのように主流社会に自らを位置づけているのかを明らかにしたい。それは，イギリスとフランスにおける多文化・多民族社会の現状を教育を受けた側である中国系第二世代の立場から浮き彫りにすることになる。このような視点は，若い世代のほとんどが移住先で生まれ育っている現在のEUの多文化・多民族的状況を把握するには必要不可欠であると考える。

また，本論は，イギリスとフランスで生まれ育った中国系第二世代のアイデンティティ形成を比較考察することによって，汎ヨーロッパという次元での中国系社会や文化やアイデンティティの構築の可能性を問う最近の研究動向(1)にも位置づけられる。なぜなら，比較考察することによって，次世代による親の背景にある中国系文化の保持を，国家よりも広いヨーロッパという枠組みで捉えることに繋がるからである。

なお，イギリスとフランスの中国系第二世代が，アイデンティティ形成過程でどのような教育を受けてきたのかについては，両国の中国語補習校［山本 2007］や正規の学校の教育のあり方［山本 2008］を取り上げ，既に比較考察をした。また，イギリスのロンドンにおいては，1989年から1990年まで１年間の現地調査を行った後，継続的に短期調査を積み重ね，ロンドンの中国系第二世代31人への教育の経験や親との葛藤などライフヒストリーを構成するインタビュー調査に基づいてアイデンティティ形成について

既に検討した［山本 2002］。本論は，以上の論考を踏まえた上で，2005年10月，2006年３月と９月と2007年３月にフランスのパリにおいて実施した中国系第二世代21人のインタビュー調査の結果を加えて比較考察をする。

Ⅰ．視点と方法

１．アイデンティティ概念

本論の中心的概念はアイデンティティであるが，本論では，文化的アイデンティティ，エスニック・アイデンティティ，ナショナル・アイデンティティ，ジェンダー・アイデンティティなどの社会的アイデンティティは，自己アイデンティティの中に位置づけられていると捉える。原は，社会的アイデンティティが自己アイデンティティと独立して存在するのかのような論じられ方に疑問を提示し，「民族や文化への帰属，それ自体は，わざわざアイデンティティという言葉を使って論じなくてはならないような問題とは言えないだろう。それが，〈アイデンティティの問題〉になるかどうかは，そのことを本人がどのように認知するか，すなわち自己アイデンティティにとって重要な意味をもつかどうかによる。」と述べている［原 1995：5-6］。「すべてのアイデンティティは，自己の構造として位置づけられて理解されるべきないのである。」［原 1995：10］。

では，自己アイデンティティとは何であるのか。本論では，近代化というマクロな影響と個人レベルでの自己アイデンティティの新しいメカニズムの出現との関係を論じたギデンズに依拠して自己アイデンティティを捉える。ギデンズは，「自己アイデンティティは，個人の持つ一つ或いはいくつかの特性を指すのではない。自己とは，人が自分の人生を語ることによって内省的に理解しているものである。これは，時間や場所を超えて持続するが，当人が内省的に解釈することによって持続するものである。」と述べている［Giddens 1991：53］。つまり，「自己アイデンティティとは，いくつか自己を語ることのできる物語の中からある一つの語りを持続できる力なのである。」［Giddens 1991：54］。本論では，ギデンズに依拠して，個人の自己についての語りとして自己アイデンティティを捉え，そのような自己についての語りの中で，いかに文化によるアイデンティティが語られ，それが自己の形成とどのように関わっているのかに着目して検討したい。

その際，ホールの示した，カリブ海系映画の表象にみられる文化とアイデンティティの関係を捉える二つの異なった視点は示唆的である［Hall 1989］。第一の視点は，一つの共有された文化によって文化的アイデンティティを定義するものである［Hall 1989：69］。共有された歴史的経験と文化的コードが「一つの集団」という意識を与え，その意識こそ真なるものであり，「カリビアン性」の本質であるという捉え方である。この視点から中国系第二世代の文化的アイデンティティを捉えると，親の背景にある長いの歴史をもつ本質的な固定的静的な中国文化によって，たとえ移住先で育っても，中国人の子どもは本質的な中国人性を保持しているとされる。もしそうでない場合は，本質的な中国文化に対する不純性によるものとして捉えられる。

第二の視点では，文化的アイデンティティは，発見されることを待っている永遠の過去を取り戻すことに基づいているのではなく，過去の語りの中に自分自身を位置づける仕方に与えられた名づけであるという捉え方である［Hall 1989：70］。つまり，文化的アイデンティティは，歴史や文化の言説における自己確認（identification）の地点であり，本質ではなく，位置取り（positioning）として捉えられている［Hall 1989：71］。そして，アイデンティティは，決して完成されることはなく，アイデンティフィケーションの過程であり［Hall 1991］，固定的永続的なものではなく，状況に応じて変化するものである。また，複数のアイデンティフィケーションが共存することも可能となる。ギデンズはこれを「部分的アイデンティフィケーション（partial identification）」と呼んでいる［Giddens 1991：

46]。本論では，この第二の視点に基づいて，文化的アイデンティティを自己確認の地点であり，位置取りとして捉える。

では，個人による位置取りとしての文化的アイデンティティの選択には，何が影響をしているのであろうか。本論では，親子関係や友人関係，中国や香港訪問の経験やポピュラー・カルチャーの嗜好を要因として取り上げ，各インタビューにおいてそれぞれの項目について質問をした。三章においてイギリスとフランスの場合を比較考察する。

２．インタビュー対象者の属性（表１，表２参照）

本論のインタビュー対象者は，イギリスにおいては31人の内２人（表１・事例８，14）が幼少時にイギリスに来ていて，フランスにおいては21人の内２人（表２・事例７，11）が10代前半でフランスに来ている以外は，移住先で生まれ育った若者に絞った。イギリスのロンドンでは，1993年から1997年までの間のほぼ年一回一ヶ月の短期的調査において英語で，フランスのパリでは，2005年10月，2006年３月と９月と2007年３月に英語とフランス語でインタビューを実施した[2]。

イギリスにおけるインタビュー対象者の調査時の年齢は，15～19歳が６人，20～24歳が15人，25～30歳が10人で，男性が13人，女性が18人（その内２人が既婚）である。フランスにおいては，15～19歳が７人，20～24歳が７人，25～30歳が７人で，男性が13人，女性が８人（全員が未婚）である。インタビュー対象者の居住地は，イギリスにおいてはロンドンとその郊外，フランスにおいてはパリとその郊外である。宗教については，イギリスの場合，５人がクリスチャンで，他は特別の宗教はないと答えた。フランスの場合，４人が仏教徒と答えたが，４人共それほど信じているわけでもなく，宗教的実践も行っていない。他は特別の宗教はない。

イギリスにおけるインタビュー対象者の職業は，高校生４人，大学生５人，大学院生１人，それ以外は，事務弁護士，コンピューター技師，グラフィックデザイナー，セラピスト，薬剤師，銀行員，小学校や幼稚園教師などである。フランスにおいては，高校生５人，大学生８人，それ以外は，銀行員，IT 関連会社社員，エンジニアーなどである。両国のインタビュー対象者の学歴は，学生以外は，皆大学か大学院を卒業していた。

また親の背景については，両国の中国系移民の歴史的背景が影響を及ぼしている[3]。イギリスの中国系移民の出身地の主流は香港の新界であるのに対して（表１参照），フランスの中国系移民の出身地の主流は，ベトナム，ラオス，カンボジアからの難民で，祖父母の代が中国から東南アジアに移住している（表２参照）[4]。

イギリスの場合，両親の移民の時期は，1960年代後半から1973年までである。父親の職業は，２人の父親が地方自治体の公務員である以外は，中国料理店やテークアウェイ・ショップ[5]を自営しているか，コックやウエイターとして雇われている。母親は，家で裁縫の内職をしていたり，チャイニーズ・コミュニティ・センター[6]で料理や掃除をして働いていたり，店を自営している場合は父親と共に働いている。また，親が店を自営している場合は，子ども達は10歳頃から例外なく，放課後や週末に店を手伝って働いている。インタビュー対象者の半数が，親の店を手伝った経験があった。家庭では広東語を話す者が28人，客家語を話す者が３人，全員の第一言語は英語である。

フランスの場合，インタビュー対象者21人の内１人（表２・事例11）以外の両親は，1974年から1986年の間にフランスへ移民してきている。21人中２人の両親は中国の浙江省出身[7]であるが，第一次世界大戦中に曾祖父が若い頃に初めてフランスに来て，祖父もフランスと中国を行ったり来たりしていた。１人は1997年に11歳の時に家族で中国の浙江省からフランスに移住していた。フランスにおけるインタビュー対象者は，母親がフランス人である１人（表２・事例３）が家庭ではフランス語を話す以外は，両親とは中国語方言を話す。全員の第一言語はフ

ランス語である。親の職業はイギリスよりも多様である。

以上のような属性を持つ本論のインタビュー対象者は，数としては限られている。アイデンティティの多様性を，変数を設定して，それとの相関関係から体系的に分析するには量的な調査が必要であるが，それは意図していない。本論では，定量的分析ではなく，個人の内側からの視点を重視して，定性的アプローチを用いる。

Ⅱ．中国系第二世代の文化的アイデンティティの多様性

１．自己を位置づける言説

イギリスにおいても，フランスにおいても，中国系第二世代の誰もが自らを位置づけることのできる言説，例えば「チャイニーズ・ブリティッシュ（中国系イギリス人）」とか「チャイニーズ・フレンチ（中国系フランス人）」という言説はない。イギリスには「BBC（British Born Chinese）」（イギリス国営放送 BBC に懸けて）という中国系第二世代の一部が自らを表現する言い方があるが，主流社会には知られていない。

両国の中国系第二世代の文化的アイデンティティは多様である。大まかに分類すれば，「イギリス人（フランス人）である」，「イギリス人（フランス人）でもあり中国人でもある」，「中国人である」という三つの位置取りを結ぶ線上のどこかに自らを位置づけ，そして，その位置取りは固定的なものではなく，変化する場合もある点は共通している。

イギリスとフランスの中国系第二世代の自己を位置づける言説を比較して相違点の一つとして挙げられるのは，フランスの中国系第二世代の中には「アジア人」あるいは「カンボジア人」に自らを位置づける者がいたことである。イギリスにおいて「アジア系」とは「南アジア系」のことを示し，インドやパキスタンやバングラディッシュからの移民のことを意味するので，イギリスの中国系第二世代の中には自らを「アジア人」として位置づける者はいなかった。フランスの中国系第二世代における「アジア人」あるいは「カンボジア人」というアイデンティティについては，「Ⅱ．３．中国系第二世代の文化的アイデンティティの多様性―フランスの場合」で詳しく検討する。

ここではフランス社会において「アジア系」と「中国系」がどのように用いられているのかについて触れたい。例えば，筆者の訪問したフランスの正規の学校においては，「中国系」という表現はあまり用いられなく，「アジア系」という表現の方が一般的であった。フランス社会の側からみたら，インドシナ難民が中国系か非中国系かという区別，あるいは中国本土出身か東南アジア出身かは区別できない。フランス社会において「アジア系」とは，主に中国本土出身者と，中国系及び非中国系のインドシナ難民とその子どもを示す表現として使用され，韓国や日本の出身者も含んでいる。また，パリ13区のポルト・ド・ショワジー周辺は，インドシナ難民の集住地区であり，中国料理レストランだけではなく，ベトナム料理やラオス料理やカンボジア料理などのレストランも立ち並び，まさに「アジア街」と言った方が適切ではあるが，「中華街（Quartier Chinois）」と呼ばれている。このように，フランス社会において「中国」という表現が用いられていても，必ずしも「アジア」と区別されて用いられているわけではない。

２．文化的アイデンティティの多様性
―イギリスの場合―

イギリスにおけるインタビュー対象者31人の文化的アイデンティティの多様性については，６つに分類できる［山本 2002：171-202］(8)。

第一は，10歳頃から自らをイギリス人としてのみ位置づけている１人（表１・事例１）である。彼は，自らをイギリス人としてのみ位置づけるのは，白人が多数派を占める伝統的な私立学校に通った経験によると語った。私立学校に行くようになって，それまでのロンドン訛りのある英語から，白人の上流階級の英語に変化し，完璧な英語を身につけていることに基づいて，見かけは中国人であっても自らをイギリス人と

して位置づけていた。

第二は，中国人としてのアイデンティティが10代後半において香港の滞在を経験したことによって，イギリス人としてのアイデンティティに転換した２人（表１・事例２，３）である。その内の１人（表１・事例２）は，ロンドン近郊の小さな町で，白人が多数派を占める自分しか中国人のいない初等学校で受けた差別の経験から，自分が他の人と異なっていて「中国人であること」を意識するようになった。その後17歳で香港に行ったとき，香港は自分の所属する場所ではないと感じ，カルチャーショックを受け，その後，「イギリス人である」という位置取りに転換した。彼女にとって「イギリス人であること」は，他者から意識させられた「異なっていること」にこだわることなく，香港ではなく，イギリス社会の一員として，今後も生きていくことを意味すると考えられる。もう１人（表１・事例３）は，初等学校と中等学校において中国語（広東語）のレッスンを受けたことによって，自分が「中国人であること」を意識するようになった。18歳のときに香港を訪問した際，香港は生活様式がとても速く，人々はお金儲けにしか関心がなく，礼儀正しくないところがいやになった。それを機に，自分のことをよりイギリス人として位置づけるようになったと語った。彼女にとってのイギリス人としての位置取りの選択は，親にも共通するお金儲けにしか関心のない態度をもつ香港の人と自分との間に距離を置くことであると考えられる。

第三は，「自分は中国人であるよりも，よりイギリス人である。親といる時だけ中国人で，それ以外はイギリス人である。」と語った４人である（表１・事例４，５，６，７）。４人は，現在に至るまで中国系の友人を持たず，中国語を話すのは親との会話に限られ，自らをとても西欧化していると捉えている。中国語能力は，相手の話を聞いて理解できる程度で低い。葛藤を経験していない親との関係においては「中国人であること」を受け入れ，一歩家を出れば，イギリス人として生きていくことに葛藤を感じていない。

第四は，第三に分類した４人と同じように，中国系の友人を持たず，中国語は聞いて理解できる程度であり，自らをとても西欧化していると捉えているが，思春期において親と激しい葛藤を経験した２人である（表１・事例８，９）。この２人の女性は，10代半ばに父親に「中国人だから」と家事を強制され，外出を制限され，父親との間で激しい葛藤を経験していた。父親から押し付けられた「中国人である自分」から逃れたくとも，逃れることのできない苦しみによって，アイデンティティの危機を経験していた。その後，２人は，厳しい父のいる家を離れて大学生活を送ることによって，「人としての自分」を見出し，「中国人である」という枠からの逃れることによって自信を回復し，「イギリス人である」という位置取りを選択した。しかし，１人（表１・事例９）は，自分をイギリス人とだけ位置づけてしまっては，父や生きてきた過去の日々を切り捨てることになるので，自分がもっと中国人になりたいとも語り，自らが「中国人であること」にこだわりを示していた。

第五は，「中国人でありかつイギリスである」と語った16人（表１・事例10～25）である。４人は「イギリス生まれの中国人」とか「ブリティッシュ・チャイニーズ」という語り方をしたが，それ以外の12人は，「完全な中国人でもなく，完全なイギリス人でもない」とか「両方である」という語り方をした。幼い頃から自分を中国人として意識していた者が，10代になってイギリス人としても自らを位置づけるようになるという仕方で両方のアイデンティティを持った者もいた。全員が完全なイギリス人と中国人の中間にいて，両方が混ざりあっている自分の状況を使い分け，そういう自分を肯定していた。

第六は，自らを中国人として位置づけた６人（表１・事例26～31）である。その内の５人（表１・事例26～30）は「中国人であること」を肯定していたが，１人（表１・事例31）は思春期に「中国人であること」を否定的に捉え，

その後大学に進学し年を経る過程で，肯定をしていた。「中国人であること」の意味付けはそれぞれ異なっていて，香港への帰属意識に結びつけて捉えている者や，皮膚の色に代表されるように外見によって規定されていると捉えている者，親や親戚や友人という人間関係に結びつけて捉えている者，親の期待通りに自ら努力してきた自分のこれまでの人生によって捉えている者がいた。

３．文化的アイデンティティの多様性
—フランスの場合—

フランスにおけるインタビュー対象者21人の文化的アイデンティティの多様性は，６つに分類できる。

第一は，自らをフランス人と位置づけたり，「フランス人という方が，中国人よりも強い」と答えた５人（表２・事例１～５）である。

「この国で生まれて，フランスの国籍を持っているからフランス人で，見かけがアジア人なだけです。見かけで，他の人にどこの出身と聞かれたらカンボジアと答えるけど。」（表２・事例１）

「二つの文化を持ったフランス人だと思う。中国は自分に何も与えてくれていないし，得てきたものはフランスにおいてだから。中国へ行くと人々はぼくのことをフランス人だとみるし，ここでは中国人とみられる。自分はフランス人だと思い，振る舞いとしてはフランス人なんだけど中国人としてみられるから変な感じではある。」（表２・事例２）

「もちろんフランスで生まれてフランスの教育を受けているから，中国人よりもフランス人であると感じる。ずっと中国系フランス人と思ってきた。まさにフランス系フランス人である人とは違うことは分かっているし，本当のフランス人ではないと感じる。でもこれは豊かなことだと思っていて，否定的に捉えたことはないし，誇りである。他の人と違うということはフランスではとても大切なことだと思っている。」（表２・事例３）

「私の出自は中国系だけど，私の人生の生き方はフランス人である。フランス人としての生き方は好きだけど，自分のオリジンを忘れることはない。」（表２・事例４）

また１人（表２・事例５）は，半年前からフランス系の会社の日本支社で働いていて，筆者は日本においてインタビューをした。彼は，自分は中国文化と西欧文化の両方を理解することができ，日本に来てからも日本文化が中国文化と似ているので理解することができると述べた。日本に来る前に，大学卒業後中国を訪問して親戚に会った経験を通して，中国人としての意識が強くなった。「中国に行く前は80％自分のことをフランス人と思っていたけど，今は60～70％に減ったかな。」と語った。

上記の５人とも，自らの中国系出自を否定することはなく受け入れてはいるが，フランスで生まれ教育を受けてきたことによって，またフランス国籍を持っていることによって，自らを中国人というよりもフランス人と位置づけているといえる。

第二は，「半分中国人で半分フランス人である」と答えた１人（表２・事例６）である。

彼は，「自分に二つの側面があるのは，二つの文化を分かち合うことができるから，すごいチャンスである。」と述べた。そして，両親が仏教徒で，特に父親は中国系アソシアシオン[9]の長で，週に１回仏教の説法を北京語で10年前くらいからしていることや，家庭料理や外見から「中国人である」という意識を持った。「でも，フランスで生まれて，フランスの学校に行って，ここでしか住んだことがないのだからフランス人でもある。」と語った。

第三は，自らを中国人として位置づけた10人（表２・事例７～16）である。10人中３人（表２・事例11，14，16）の両親は，中国本土出身

であるが，それ以外の７人の親は，両親あるいはどちらかが中国系東南アジア出身である。

また２人（表２・事例７，11）は10代前半で両親と共にフランスに移住してきた。２人とも移住当初は，フランス語だけを学ぶ特別クラスで１年間学んだ。その内の１人（表２・事例７）は，両親は中国系ベトナム出身である。高校卒業時になっても大学に進学するにはフランス語に問題があり，フランス社会に適応するのがとても大変だったと語った。思春期はとても暗かったけど，専門学校を卒業後20代になって，子ども達に絵を教えていたアソシアシオンで出会ったフランス人女性が自分の話をよく聞いてくれる人で，だんだん自分自身に自信が持てるようになり，年を取るに従って明るくなっていったと語った。そして，彼は自分が自信を持つようになる過程で，自らの出自である中国文化に非常に興味を持ち，ライフワークとして中国茶を見出し，その勉強の為に現在は台湾に滞在している。10代前半でフランスに来たもう１人（表２・事例11）は，両親が中国本土出身である。最初フランスに来た時はフランス語ができなかったけど，フランス語を学びだしたらフランス語が自分の中に入ってきて，学校での成績も良く，フランス社会への適応に問題はなかった。両者共，自らを「中国人」として位置づけている。１人（表２・事例７）は中国系という出自への誇りがアイデンティティの核となっていることによって，もう１人（表２・事例11）は10代前半まで中国本土に暮らしたことによって，自らを中国人として位置づけている。

（表２・事例16）の場合は，両親が中国浙江省の青田出身である。第一次世界大戦中に曽祖父がフランスに来て以来，代々フランスとは行き来があった。彼女は，考え方に両親よりもフランス的なところはあり，100％の中国人ではないと思うが，自らを中国人として位置づけている。そして現在はアジア系の友人だけしかいなく，アジア系の友人の方が，尊敬でき分かり合うことができるので，何かあると相談するのはアジア系の友人であると述べた。

親が中国系東南アジア出身で自らを中国人として位置づけた者は，それに関して，以下のように語った。

「母が自分のことを中国人だという言い方をするので，カンボジア人とは思わない。母にとってカンボジアというのは，ただ住む所として受け入れてくれたところであって，文化としてのルーツではない。父も同じだと思う。」（表２・事例９）

「お父さんはベトナムで育ったので，確かにアジア系と言ってもいいのだけれども，自分の受けた教育が中国的だったので，自分のことは中国人であると思う。例えば，死者のことを話してはいけないとか，家具の位置を決める風水の慣習が家の中にはあったし，中国の歴史についてもよく家族の話題になって，中国を自分のルーツだと感じていた。」（表２・事例８）

父方の祖母が中国出身で両親がラオス出身の女性（表２・事例10）は，両親が北京語を話すことが中国人としての位置づけと関係していると以下のように述べた。

「もし，父や母が自分にフランス語で話しかけていたら違ったかもしれないが，両親が中国語で話しかけていたことによって，自分は中国人としての自分のオリジンに対して尊敬の念が強い。（中略）両親が祖先をすごく大切にして，いつもお祈りをしていた家庭で育ち，家の中が中国的であったので，親から受けた教育によって自分のことを中国人であると思う。」（表２・事例10）

以上から，親が東南アジアで生まれ育っていても中国人としての意識を持ち，家庭では中国語を話し，渡仏後も子どもに中国人としての意識を持って教育したことによって，第二世代は自らを中国人として位置づけるようになったことがわかる。

また，自らを中国人として位置づける者の中には，「フランス人とは感情的に統合できない」とか「フランスの価値観に自分が合っていない」と語る者もいた。こうしたフランス社会との違和感も中国人としての位置づけと結びついているといえる。しかし，中国人と自らを位置づけても，中国とフランスという二つの文化は自分の中でうまく混ざり合っていると以下のように語った者もいる。

「自分の中でフランスの文化と中国文化がすごくうまく混ざり合っている。中国文化のたとえば過去だとか祖先を大事にするような面をとても尊敬するけど，フランスという自分の両親を受け入れてくれた国に対する尊敬の念もすごく大きいので，二つの文化は全く違うけど，自分のなかですごくいいように混ざり合っている。」（表２・事例10）

さらに，自らを中国人として位置づけている者は，中国語や中国の歴史や文化についてもっと学びたいという気持ちが強いということも指摘できる。

「文化大革命などの中国の本を読んで，中国のことをもっと知りたいと思う。フランス人の彼氏に中国のことを説明しきれないこともあって，そういう時は自分が残念でくやしい。これから中国に行くことがあったら，北京語を話せたらもっと現地に馴染めるので，今独学で中国語の勉強を始めている。」（表２・事例16）

第四は，自らを「アジア人」と位置づけた２人（表２・事例17，18）である。２人の内１人（表２・事例17）は，父親はラオス出身で母親はベトナム出身であるが，母方の曽祖父が中国出身である。家庭ではベトナム語を話す。もう１人（表２・事例18）は，両親共ラオス出身であるが，父方と母方の祖父が中国の出身である。父親はラオス語とタイ語と潮州語を，母親はラオス語とタイ語とフランス語が話せる。彼は，両親にはフランス語で話しかけるが，返事はラオス語で返ってくる。アジア人として自らを位置づけた２人とも，曽祖父母か祖父母の誰かが中国の出身であるが，自らを中国人とは位置づけていない。２人ともに共通しているのは，家庭では中国語が話されていないことである。

もう一点，２人に共通しているのが，ポピュラー・カルチャーの嗜好が「アジア的」であることである。中国の音楽や映画だけではなく，日本や韓国やベトナムの音楽が好きであったり，日本や韓国のアニメ番組や漫画[10]に親しんでいる。これも「アジア人」という位置づけに影響を及ぼしていると考えられる。

また，両親が非中国系ベトナム出身でフランスで生まれ育った男子高校生は，自らのことをベトナム人と位置づけ，アジア人とは言わなかった。つまり，「アジア人」というアイデンティティは，「中国人」「ベトナム人」「カンボジア人」「ラオス人」というアイデンティティの交錯する中で選択されているといえる。

第五は，自らをカンボジア人と位置づけた１人（表２・事例19）である。彼女は，父方の祖父母が中国出身で両親はカンボジア生まれである。家ではカンボジア語を話す。中国に出自があっても，中国語を話さないことと中国人として自らを位置づけないことは関連しているといえる。彼女はフランスで幼い頃からカンボジア人の母方祖母に面倒をみてもらっていて，幼い頃から自分のことをずっとカンボジア人と思ってきた。

「フランスで生まれ育ったけれども，両親から伝統的なものをとても受け継いでいて，自分をすごくカンボジア人だと思う。フランス人の友人もいて，フランスの文化もわかるけど，結局自分はカンボジア人だと思う。」（表２・事例19）。

彼女は，自分のことをカンボジア人と思うが，フランス社会の中で違和感を感じたことは全くなく，この国の文化や食べ物や美術館も好きだ

と述べた。

第六は，中学生の頃は自らをアジア人として位置づけていたが，その後フランス人としての意識の方が強くなった２人（表２・事例20，21）である。

「生き方がフランス的だし，ぼくの文化的アイデンティティの中には，確かにアジア的なものは残っているけど，フランス人だと思う。中学校の初め頃は，香港の音楽が好きで，自分がアジア人だと思っていて，中華新年のお祭りでドラゴンを持ったこともあるけど。」（表２・事例20）。

この語りは，中学校初めの頃はアジア人として位置づけていたが，調査時の26歳ではよりフランス人としての意識が強くなったことを示している。

もう１人（表２・事例21）は，中学生の頃は自分のことをアジア人と思っていたけれど，高校生からはフランス人であるという意識が強くなったと以下のように語った。

「中学の頃は，家族が厳しかったのであまり外出することもできないし，中国人だけのクラスにいたので，自分がアジア人だという気がしていた。その後，フランス人が多い高校に入って，ヨーロッパ文化と対面した気がした。中学まではものすごく強く自分をアジア人と思っていたけど，今はフランス人だと思う。（中略）小さい頃からフランスの文化の中にいたにもかかわらず，中学でアジア人の中に閉じ込められたので，フランスにいるにもかかわらず，フランスのことをあまり知らない状況であった。高校になって，友人や環境を通してフランスに触れることを通して，フランス人と感じるようになった。」（表２・事例21）

彼女は，パリ13区の東南アジア系移民の集住地区にある中学校に通い，全員が中国系で構成されている特別クラスにいた。中学校ではすべての教科をアジア系生徒だけで受けていたので，学校があまり楽しくなかったが，その後高校に入った時の変化を以下のように語った。

「中学の時は特別クラスの構成上，いつもアジア系の友人ばかりといて，あまりに閉鎖された世界にいる気がした。〈外部〉と接触がなかった。アジア人を嫌うわけではないが，あまりに同じ文化の人が集まっていた。例えば，何かを話すにしても，わざわざ説明しなくてもすむことがあった。そして，特に高校に入ったときに，〈外部〉と自分を混ぜていくことを非常に難しく感じた。高校では，フランス人が特に多い環境になったので，今までいちいち説明しなくて良かったことを説明しなくてはいけない生活に急に変化した。」（表２・事例21）

以上の２人（表２・事例20）は，初めは中国人ではなくアジア人として自らを位置づけていたが，その後フランス人という意識が強くなっている。なぜ初め中国人ではなく，アジア人として位置づけていたのか。２人とも家庭では両親の少なくとも一方とは中国語を話しているが，中国人ではなくアジア人という位置づけを選択していた。その理由ははっきりしないが，アジア人の方が中国人というアイデンティティよりも流動的で，フランス人というアイデンティティに移行しやすいのではないかと考えられる。

Ⅲ．比較考察

本章では，イギリスとフランスにおける中国系第二世代のアイデンティティについて，１．最も多い位置取り，２．親との葛藤とアイデンティティの危機，３．友人関係，４．香港や中国訪問の経験，５．ポピュラーカルチャーの嗜好，という５つの視点から比較考察をする。

１．最も多い位置取り

イギリスにおけるインタビュー対象者31人中の16人は「中国人でありかつイギリス人である」と自らを位置づけているのに対して，フランス

では「中国人でありかつフランス人である」という位置取りを選択したのは１人である。また，イギリスにおけるインタビュー対象者31人の内「中国人である」と位置づけているのは６人であるのに対して，フランスにおけるインタビュー対象者21人の内10人は「中国人である」と自らを位置づけている。本論では，定量的分析ではなく，定性的アプローチを用いているので，それぞれ６つの分類に振り分けられた人数を厳密に比較検討するわけではない。しかし，イギリスにおいて最も多いのが「中国人でありかつイギリスである」という位置取りであるのに対して，フランスにおいて最も多いのが「中国人である」という位置取りであることについては着目したい。

またフランスにおいては，中国人として位置づけているのは10人で，アジア人と位置づけている２人とカンボジア人と位置づけている１人を加えると，21人中13人が自らをフランス人として位置づけていないことになる。これに対して，イギリスの場合31人中，中国人としてだけ位置づけたのは６人だけで，他の25人は自らをイギリス人と位置づけていた。つまり，イギリスと比較した場合，フランスの中国系第二世代の方が，主流社会に自らを位置づける者が少ない。

その理由は複合的であると考えられるが，イギリスとフランスにおける正規の学校の中国系第二世代に対する教育のあり方を比較考察した結果からは，両国において中国系第二世代の文化的背景に配慮した教育は積極的に行われておらず，それ程違いがなかった［山本 2007］。しかし，イギリスの中国系移民は全国に散住しているので中国系の子どもは学校に多くても20～40人で目立たない存在であるのに対して，フランスは集住地区があり，集住地区にある学校では半数以上が中国系の子どもで占める学校もあった。こうした状況は，中国系第二世代のアイデンティティのあり方に影響を与えたのではないかと考える。

また，ここでのインタビュー結果からは，家庭教育のあり方が，フランスにおける中国系第二世代のアイデンティティに影響を与えていることがわかる。フランスにおいて「中国人である」と位置づけた10人中７人は，どちらかの親が中国系東南アジア出身である。前章において，親が東南アジアで生まれ育っていても中国人としての意識を持ち，家庭では中国語を話し，渡仏後も子どもに中国人としての意識を持って教育したことによって，フランスの中国系第二世代は中国人としての意識を持ったことを示した。これは，渡仏前のベトナムやラオスやカンボジアにおける中国に出自をもつ親世代が，中国人としての意識をかなり保持していることも示している。そして，東南アジア出身の親はほとんどが仏教徒で，人によって頻度に違いはあるが，移住後もお寺（パゴダ）に通っている。これに対して，イギリスの中国系第一世代においては，皆が通うようなお寺はなく，宗教心は厚くない者がほとんどである。こうした親世代の宗教への態度の違いも，第二世代のアイデンティティに影響を与えていると考えられる。

２．親との葛藤とアイデンティティの危機

イギリスにおいては，31人中２人が親と激しい葛藤を経験し，文化的アイデンティティの選択に影響を及ぼしていた。しかし，フランスのインタビュー対象者には，イギリスの２人のような数年に渡る激しい親との葛藤を経験した者はいなかった。イギリスにおいてもフランスにおいても，親との葛藤を全く経験しなかったと語る者もいたが，中学生から高校生の頃に親に夜や放課後の外出を禁止され，他の友人のように遊べなかったこと等で親との間に葛藤があったと語る者はいた。これは，いわゆる思春期における親との葛藤といえ，大学入学以降，こうした葛藤は小さくなっていたことは両国において共通していた。

フランスの高校生のインタビュー対象者で親との葛藤を経験したと語った者の中では，例えば（表２・事例15）は，「母親が学校で良い点をとることに非常に厳しくて，泣けてくる。自

分がどんなに努力しても母は認めてくれない。」と語った。（表２・事例13）は，夜の外出は親に禁止されていて，午後でも用事がないのに外出すると親がいやな顔をして，ソファーに寝転んでいるとすぐに勉強しなさいと言われると語った。また（表２・事例11）は，親は自分が中国人と結婚して，お金を稼いで，親を養うことが良いと考えていて，全く考えが合わなくて，いつもけんかをしていると述べた。

思春期以降では，子どもに中国系のパートナーを望む親と，非中国系パートナーを選んだ第二世代との間には両国ともに葛藤があるといえる。フランスのインタビュー対象者の女性（表２・事例16）は，21歳のときにフランス人の恋人が出来たとき，両親は同じ地域出身の中国人のパートナーを望み，いつも言い合っていたという。特に母親はフランス人の彼氏には反対していたけど，その後フランス人の彼氏が２回できたことで，段々慣れてきたようだと語った。

また，イギリスにおけるインタビュー対象者31人中５人（表１・事例３，７，８，24，31）は，10代前半から後半にかけて，何らかの悩みを経験したと語った。それについては既に５人の語りに基づいて検討したので［山本 2002: 111-118］，ここでは詳細は述べない。５人中１人（表１・事例24）の悩みは，「中国人であること」に関わっていない，進学に伴って経験する不安定さであった。他の４人（表１・事例３，７，８，31）の悩みは「中国人であること」をめぐる悩みであり，親との関係において，あるいは他者の眼差しを意識することによって「中国人である」という枠とその意味を押し付けられ，それによって自己が規定されてしまい，そこから逃げられず自己を見失ったり，完全なイギリス人でも中国人でもないことによる不安定さからもたらされたものであった。そして５人共，大学に進学し学生生活を送る中で自信を回復し，この時期の悩みを抜け出していた。

フランスにおけるインタビュー対象者においては，21人中３人（表２・事例７，８，17）が10代前半から後半にかけて何らかの悩みを経験したと語った。前述したが，１人（表２・事例７）は10代前半でフランスに移民してきて，フランス語の習得に非常に困難を感じ，フランス社会へ適応できずに悩んだ。もう１人（表２・事例８）は，中学校までパリ郊外の移民の多い地区にいたが，白人が多数派のパリの高校に進学して，人種差別を経験した。そして高校生の頃は自分が「中国人であること」を恥と感じていたが，大学には中国系学生も多く，段々自らが「中国人であること」を肯定できるようになったと語った。もう１人（表２・事例17）は中学生の時に自分が何者かわからなくて，悩んだことがあると語った。彼の父親はラオス出身で母親はベトナム出身であるが，母方の曽祖父が中国出身であり，現在は自らをアジア人と位置づけている。

「中学の頃，自分のことをラオス人かベトナム人か何と言っていいのかわからなかったけど，カメラ工場で研修をした時，色々なオリジンの人と出会い，一緒に働いたことによって，そういうことは悩まなくなった。」（表２・事例17）

両国のインタビュー対象者は，親の背景にある文化と主流社会の文化との境界で自己形成をしているが，前述した少数の者以外は，自己形成の過程でアイデンティティの悩みを抱えていなかった。イギリスの方が，親との葛藤が激しく，アイデンティティの危機が深刻だった者がいたが，フランスの中国系第二世代の抱える悩みと程度の差はあるが共通するものであった。そして両国のインタビュー対象者共，大学に進学したりして人生経験を積む中で，10代の悩みを解消していた。移民第二世代は二つの文化の狭間で自己形成することによって，世代間の葛藤やアイデンティティの危機に悩む存在であるとする言説は，移民第二世代を一括りにし，実際のあり方を捉えていないといえる。

３．友人関係

イギリスとフランスにおける中国系第二世代

は，学校や職場においては中国系以外の人々との相互交流が多いが，インフォーマルな親密な付き合いにおいてはどうであろうか。

イギリスにおけるインタビュー対象者の友人関係は，三つに分類できる［山本 2002：134-142，2005：92-93］。第一は中国系の友人を持たない者，第二は中国系の友人もそれ以外の友人も両方を持つ者，第三は親しい友人はほとんどが中国系の者である。フランスのそれも同じように三つに分類できるが，フランスの中国系第二世代への友人関係に関するインタビューの答えの中では「中国系の友人」という表現は用いられず，「アジア系の友人」という表現が用いられた。つまり，フランスの中国系第二世代にとって，友人関係を筆者に説明するのに，「アジア系」であれば中国系と非中国系の違いは重要ではなかったといえる。

第一の中国系（アジア系）の友人を持たない者が「イギリス（フランス）人である」というアイデンティティを持ち，第二の両方の友人を持つ者が「イギリス（フランス）人であり中国人である」という両方のアイデンティティを持ち，第三の中国系（アジア系）の友人しか持たない者が「中国人である」というアイデンティティを持つと，はっきりと分類できるわけではない。しかし，上記のような傾向があること，換言すれば友人関係のあり方と文化的アイデンティティには相関関係があることは指摘できる。

友人関係のあり方は，地域や学校に中国系が多いか少ないかという環境的な要因も作用するが，特に大学入学以降は個人による友人の選択によって変化していく。イギリスの大学には中国系第二世代の団体（サークル）があり，それまであまり中国系の友人のいなかった者でも，中国系第二世代のサークルを通して中国系第二世代の友人と親交を深め，段々友人関係が中国系だけに限定されていく場合もある。フランスの大学では中国語を学ぶコースで中国系の友人と出会ったと語る者が多かった。現在はアジア系の友人だけしかいないというフランスの女性（表２・事例10）は，「アジア系の人との方がうまくいくのは，まさにメンタリティーの問題である。」と語った。つまり，中国系（アジア系）の友人しか持たない者は，それ以外の出自を持つ友人とは違和感がある場合もあり，中国人として自らを位置づける者が多いといえる。逆に，高校くらいまでは中国系（アジア系）の友人がいても，段々と中国系（アジア系）の友人との付き合いがなくなっていく者もいる。こういう場合は，イギリス（フランス）人として自らを位置づける傾向があることを指摘できる。そして，友人関係のあり方は，後述するポピュラー・カルチャーの嗜好にも影響を与えるといえる。

４．香港や中国訪問の経験

イギリスにおいてもフランスにおいてもインタビュー対象となった中国系第二世代の中には，親や祖父母の出身地である香港や中国訪問によって文化的アイデンティティに影響を及ぼされた者がいた。イギリスとフランスを比較すると，イギリスのインタビュー対象者の方が，文化的アイデンティティに大きな影響を及ぼされていた[11]。21歳のときに１年間香港で働いた経験があるイギリスの女性（表１・事例９）は，以下のように語った。

「香港に行って自分の民族の人に〈イングリッシュ・ガール〉と呼ばれて本当に当惑した。私は，なぜ〈イングリッシュ・ガール〉と呼ばれるのかと思い，いやだった。私は，イングランドに育ったのだけれども，イングランドにいる時はこんな気持ちにならなかった。」（表１・事例９）

そしてイギリスのインタビュー対象者の中には，香港訪問によって自らを中国人として位置づけることができなくなったと語る者もいた。

「５年前に香港に初めて行った時，30分で自分の広東語があまりにへたで，親族と話すことができないことがわかり，とてもカルチャーショックを受けた。そのとき，自分は中国人ではない

と思った。」（表１・事例７）

「４年前に香港に行った時に，カルチャーショックを受けた。私は香港が大嫌いでとても帰りたくて仕方がなかった。香港が私の所属する場所であると思っていたけど，行ってみるととてもいやだった。だから自分はどこに属しているのかわからなくなってしまった。」（表１・事例２）

上記の語りのように，イギリスのインタビュー対象者の中には，香港を訪問し，自らの広東語の能力不足や，香港の人が拝金主義で礼儀正しくないので嫌いになって，自らを中国人として位置づけられなくなったと語った者がいた。

逆に，フランスのインタビュー対象者の中では２人（表２・事例３，５）が，中国訪問によって自らの中国人としてのアイデンティティをより強めていた。１人（表２・事例３）は，父親が中国系カンボジア出身で母親がフランス人であるが，３年前に初めて中国旅行に行って「祖父母の住んでいた場所を訪れて，何か強いものを感じた。」と語った。彼はそれ以来，自らの中国という出自に非常に興味を持ち，１年前から中国語を学ぶようになった。また，もう１人（表２・事例５）は，両親が中国系カンボジア出身で，１年前に祖父母の故郷を訪れて，今まで会ったことのなかった親戚に会ったりして，中国人としての意識が旅行前よりも強くなったと語った。

イギリスのインタビュー対象者には，香港訪問によって自らを中国人として位置づけられなくなったと語った者がいたのに対して，フランスのインタビュー対象者には中国訪問によって自らの中国人としてアイデンティティを強める者がいた。その理由は，イギリスの中国系第二世代にとって，香港は親の出身地であり，イギリスにおいて自らの中国人としてのアイデンティティを直接香港に結びつけてイメージするので，実際に訪問したときに感じるギャップ（カルチャーショック）が大きいのではないかと考える。

これに対して，フランスのインタビュー対象者にとって，中国は祖父母の出身地である場合が多く，フランスにおいて自らの中国人としてのアイデンティティと直接結びつけてイメージするには中国は遠すぎる存在なので，実際に訪れた時の否定的な印象が小さく，逆に中国人としての意識を強める者もいるのではないだろうか。

５．ポピュラー・カルチャーの嗜好

イギリスの中国系の若者の文化的アイデンティティについて論じたパーカーは，中国語の読み書き能力がほとんどなくても，家族や友人を通して香港のポピュラー・カルチャーを部分的に理解し親しむことが，中国人としてのアイデンティティの要素になっていると指摘している[Parker 1995: 146]。筆者の滞在したロンドンの中国系移民の一家庭では，両親は深夜に衛星放送やビデオで香港の映画やドラマを見るのを最大の娯楽にし，子ども達もカラオケで香港の音楽に親しんでいた。ソーホー地区の中華街に行けば，香港のCDやビデオも手に入れることができる。イギリスのインタビュー対象者の中でも，香港の音楽や映画をよく見ると答えた者はいたが，中国人と位置づけた者が皆そうであるとはいえなかった。しかし，自らをイギリス人としてのみ位置づけたり，「親といるときだけ中国人でそれ以外はイギリス人」と位置づけた者は，香港の映画や音楽には興味を持っていなかった。

フランスのインタビュー対象者の方が，文化的アイデンティティとポピュラー・カルチャーの嗜好がはっきりと重なっていた。自らをフランス人と位置づけたり，「フランス人という方が，中国人よりも強い」と答えた５人（表２・事例１～５）は，フランスの音楽や映画の方が好きで，中国の音楽や映画には興味がないと答えた。それ以外の16人（表２・事例６～21）は，中国の音楽や映画が好きと答えた者，中国だけではなく韓国や日本の映画や音楽あるいは日本の漫画やアニメが好きと答えた者，中国の音楽や映画は好きではないが，日本や韓国の音楽や

映画は好きと答えた者，日本の音楽しか好きではないと答えた者，ベトナム音楽やタイ音楽が好きと答えた者もいた。16人中３人以外は，フランスの映画や音楽は好きではないと答えた。

フランスの場合，中国の音楽や映画に限定されずに，日本や韓国やベトナムやタイの音楽や映画に興味を持っている者が多いことも指摘できる。インタビュー中でも日本の漫画やアニメやタレントの話題が出ることがよくあった。フランスの中国系第二世代が用いる「アジア系」という表現には，中国に限られずにアジアに広がっているポピュラー・カルチャーへの嗜好も反映されているのではないかと考える。また，日本のポピュラー・カルチャーへの興味は，中国系第二世代に特有のものではなく，フランス社会全体にもみられる。

おわりに

本論は，イギリスの中国系第二世代のアイデンティティ形成に関する調査結果に，近年実施したフランスでの同じ趣旨の調査結果を重ねて比較考察をした。フランスのインタビュー対象者の方がイギリスよりも少ないという欠点はある。しかしながら，イギリスとフランスの中国系移民は，歴史的背景や出身地なども異なるが，第二世代のアイデンティティ形成について，語られた生の声を中心的資料に用いた本論の比較考察は，先行研究にはなかったものである。

結論としては，共通点２点，相違点４点に整理できる。

まず第一の共通点として，両国の中国系第二世代の文化的アイデンティティはそれぞれ６つに分類して検討したが，大まかに分類すれば，「イギリス人（フランス人）である」，「イギリス人（フランス人）でもあり中国人でもある」，「中国人である」という三つの位置取りを結ぶ線上のどこかに自らを位置づけ，そして，その位置取りは固定的なものではなく，変化する場合もある点である。

第二の共通点は，両国のインタビュー対象者共，世代間の葛藤やアイデンティティの危機に悩んだ者は少数であり，その悩みは程度の差はあるが内容的には似ている。

次に，第一の相違点は，イギリスの中国系第二世代にはいなかったが，フランスには「アジア人」あるいは「カンボジア人」に自らを位置づけた者がいたことである。

第二の相違点は，フランスの中国系第二世代の方が，中国人として自らを位置づけた者が多いこと，主流社会に自らを位置づける者が少ないことである。

第三の相違点は，イギリスのインタビュー対象者には，香港訪問によって自らを中国人として位置づけられなくなったと語った者がいたのに対して，フランスのインタビュー対象者には中国訪問によって自らの中国人としてアイデンティティを強める者がいた。

第四の相違点は，フランスにおける中国系第二世代のポピュラー・カルチャーの嗜好は，イギリスの場合のそれに比較して，文化的アイデンティティの選択との関連がはっきりしていて，日本や韓国やベトナムやタイの音楽や映画に広がっていたことである。

以上で最も着目したいのは，第二の相違点として指摘した，フランスの中国系第二世代の方がイギリスよりも，中国人として自らを位置づける者が多く，主流社会に自らを位置づけている者が少ないことである。多文化主義を主流の言説とするイギリスよりも，移民の「統合」を理念として掲げるフランスの方が，中国系第二世代で見る限り「統合」していないといえる。それがなぜなのかは，複合的な要素が絡み合っているが，本論から指摘できた一つの理由は，フランスにおいて「中国人である」と位置づけた多くの親は中国系東南アジア出身であるが，親が東南アジアで生まれ育っていても中国人としての意識を持ち，渡仏後も家庭では中国語を話し，子どもに中国人としての意識を持って教育したことである。

そして，本論の結論に関連した以下の小坂井の指摘［小坂井 2004］は，イギリスとフランスの多文化的状況を今後考えていく上で示唆に

富む。多民族・多文化主義では，外部と内部を隔てる壁を取り去るのではなく，反対に両者の融合を阻止するがゆえに外部が馴到される。それに対して普遍主義においては，外部の痕跡を内部において消し去る過程を通して，かえって外部の異質性が実質的に残存すると述べている［小坂井 2004：121］。本論は，多文化主義のイギリスと普遍主義のフランスにおける中国系第二世代のアイデンティティを比較検討することを通して，第二世代の視点から多文化的状況を問い直す一つの試みであった。普遍主義の方が差異性が残存するという小坂井の指摘について，今後も，移民の日常的視点から綿密にフィールドワークをすることを通して実証的に追求していきたい。

附記：本論は文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)(2)（課題番号17530622）研究課題「EU における中国系第二世代の学校適応に関する教育人類学的研究」（研究代表者：山本須美子）の研究成果である。

【引用文献】

小坂井敏晶　2004，「開かれた国家理念が秘める閉鎖機構―フランス同化主義をめぐって―」，『フランスとその<外部>』（石井洋二郎・工藤庸子編），東京：東京大学出版会

原裕　1995，「異文化接触とアイデンティティ」，異文化間教育学会編『異文化間教育９　特集：異文化接触とアイデンティティ』，アカデミア出版会，29-51頁。

山本須美子　2002，『文化境界とアイデンティティ―ロンドンの中国系第二世代―』，福岡：九州大学出版会。

山本須美子　2005，「イギリスにおける中国系移民のエスニシティ―第一世代・第二世代における人間関係構築の比較から」，『東洋大学社会学部紀要』42-2：81-100。

山本須美子　2007，「EU における中国語補習校の役割と課題―イギリスとフランスの比較から―」，『東洋大学人間科学総合研究所紀要』7：175-194。

Benton, G. and F.N. Peike (eds.), 1998, *The Chinese in Europe*. London: Macmillan Press LTD.

Giddens, A., 1991, *Modernity and Self Identity*. Cambridge: Polity Press.

Hall, S., 1989, 'Cultural Identity and Cinematic Representation', *Framework* 36: 68-81.

Hall, S., 1991, 'Old and New Identities, Old and New Ethnicities', King, A.D. (ed.), *Culture, Globalization and the World System*, State University of New York, pp. 41-68.

Parker, D., 1995, *Through Different Eyes: The Cultural Identities of Young Chinese People in Britain*, Research in Ethnic Relations Series, London: Avebury.

<注>

(1)　ベントンとピークの編集によって，1998年に『ヨーロッパの中国人』が出版され，この本によって初めてヨーロッパという枠組みで中国系移民を捉える有効性が指摘された［Benton and Pieke 1998］。

(2)　フランス語によるインタビューの詳細な部分の翻訳は，田川千尋氏の助けを借りた。

(3)　イギリスとフランスにおける中国系移民の歴史的背景については，別稿［山本 2007］を参照。

(4)　フランスにおける東南アジア出身の親の「中国系」とは，インタビュー対象者の曽祖父母あるいは祖父母の両方あるいはどちらかが，中国から東南アジア（ベトナム，ラオス，カンボジア）に移住していることを示す。

(5)　中国料理を持ち帰りできる店で，イギリス人の特に労働者階級の食習慣にマッチし，1970年代に増えた。ほとんどの店が家族労働によって営まれている。

(6) チャイニーズ・コミュニティ・センターは，区役所や各方面からの寄付によって資金援助されて運営されている。現在，イギリスの中国系移民に日常生活に最も関わりの深いアソシエーションである。詳細は別項参照［山本 2004：85-90］。

(7) 第一次世界大戦中から1920年代後半をピークに，浙江省の特に温州と青田という二つの町出身の移民が，現地の食料不足と主要収入源である水晶・翡翠加工産業の崩壊に影響を受けて渡仏した。当時フランスは失業率が高く，パリのリヨン駅付近で行商に携わった。1945年以降はパリ３区に移動し，現在も皮革や小間物商を営んでいる。

(8) イギリスにおける中国系第二世代のアイデンティティの多様性についての詳細は，すでに検討したので［山本 2002：171-202］，ここでは詳細は述べないで概略を記す。

(9) アソシアシオンは，英語のアソシエーション（association）に相当するものであり，「連合」「結社」「組合」「結合」「協同体」「協会」などと訳されている。フランス固有の歴史的文脈からくる特有性があることから，フランスにおいては「アソシアシオン」という片仮名表記を用いる。

(10) フランスでは日本の漫画はブームになっていて，パリの本屋には [manga] コーナーが設けられ，フランス語に翻訳された日本語の漫画が沢山置かれている。

(11) イギリスのインタビュー対象者の香港の経験については，既に詳しく検討した［山本 2002：142-147］。

表１　イギリスにおけるインタビュー対象者属性表

	性別	年齢	移住時年齢	職業	父親出身地	母親出身地	父親職業	母親職業	家庭での言語	宗教
1	M	23	イギリス生	事務弁護士	中国系 マレーシア	中国系 マレーシア	公務員	主婦	英語	無
2	F	21	イギリス生	大学生(生物学)	香港新界	香港新界	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	客家語	無
3	F	18	イギリス生	大学生(薬学)	香港新界	香港新界	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
4	M	27	イギリス生	融資会社社員	香港新界	中国	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
5	M	28	イギリス生	日系旅行会社社員	香港	中国系 マレーシア	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
6	M	22	イギリス生	リサーチ会社社員	香港新界	香港新界	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
7	M	24	イギリス生	コンピューター技師	香港新界	中国	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
8	F	28	5	ニットデザイナー	香港新界	中国	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
9	F	26	イギリス生	服飾会社社員	香港	中国系 マレーシア	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
10	F	24	イギリス生	内務省公務員	香港	香港	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
11	F	23	イギリス生	幼稚園教師	香港	香港	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
12	F	24	イギリス生	小学校教師	中国	香港	ウエイター	洋裁の内職	広東語	クリスチャン
13	M	25	イギリス生	銀行員	香港	中国系 マレーシア	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
14	F	27既婚	2	銀行員	中国	香港	コック	清掃婦	広東語	無
15	F	23既婚	イギリス生	親の店の手伝い	中国	香港	コック	清掃婦	広東語	無
16	F	17	イギリス生	高校生	中国	台湾	テーラー	夫の仕事の手伝い	広東語	無
17	M	24	イギリス生	大学卒業後求職中	香港	中国系 シンガポール	コック	食堂手伝い	広東語	クリスチャン
18	F	22	イギリス生	言語療法士	香港	香港	死亡	テークアウェイ ショップ	広東語	クリスチャン
19	M	22	イギリス生	グラフィック会社社員	香港	中国系 シンガポール	コック	食堂手伝い	広東語	クリスチャン
20	F	23	イギリス生	大学院生(生態学)	香港新界	香港新界	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
21	F	17	イギリス生	高校生	中国系 マレーシア	中国系 マレーシア	公務員	主婦	英語	無
22	M	26	イギリス生	コンピューター技師	香港新界	香港新界	コック	ウエイトレス	広東語	無
23	F	18	イギリス生	高校生	中国	香港	コック	清掃婦	広東語	無
24	F	21	イギリス生	大学卒業後求職中	中国	香港	コック	清掃婦	広東語	無
25	M	25	イギリス生	大学生(美術系)	中国	台湾	テーラー	夫の仕事の手伝い	広東語	無
26	F	24	イギリス生	大学生(都市工学)	中国	香港	レストラン経営	夫の仕事の手伝い	広東語	無
27	F	19	イギリス生	高校生	香港	香港	コック	主婦	広東語	無
28	M	26	イギリス生	大学院終了後求職	香港	香港	コック	夫の仕事の手伝い	広東語	無
29	M	18	イギリス生	大学生(IT)	香港新界	香港新界	コック	洋裁の内職	広東語	無
30	F	24	イギリス生	福祉系公務員	香港新界	中国	テークアウェイ ショップ	テークアウェイ ショップ	広東語	無
31	M	22	イギリス生	薬剤師	香港	香港	テーラー	主婦	広東語	クリスチャン

表２　フランスにおけるインタビュー対象者属性表

	性別	年齢	移住時年齢	職業	父親出身地	母親出身地	父親職業	母親職業	家庭での言語	宗教
1	F	17	フランス生	高校生	中国系カンボジア	中国系カンボジア	電気屋店員	主婦	広東語	仏教
2	M	19	フランス生	大学生(情報工学)	中国浙江省	中国浙江省	鞄店自営	鞄店自営	温州語	無
3	M	24	フランス生	大学生(中国語)	中国系カンボジア	フランス	ウエイター	主婦	フランス語	無
4	F	20	フランス生	大学生(中国語)	中国系カンボジア	中国系カンボジア	ウエイター	縫製工場	潮州語	無
5	M	25	フランス生	IT 関連会社社員	中国系カンボジア	中国系カンボジア	ウエイター	主婦	広東語,潮州語	無
6	M	22	フランス生	大学生(財政学)	香港	マカオ	洋服生地販売	主婦	広東語	無
7	M	34	12	アルバイト	中国系ベトナム	中国系ベトナム	ウエイター	ベビーシッター	北京語	無
8	F	22	フランス生	大学生(情報工学)	中国系ベトナム	香港	ブラッセリー自営	父親の手伝い	広東語	仏教
9	F	18	フランス生	高校生	中国系カンボジア	中国系カンボジア	TV 会社	食料品店	福建語	無
10	F	25	フランス生	銀行員	中国系ラオス	中国系ラオス	無職(果物店)	主婦	北京語	無
11	M	20	11	大学生(情報工学)	中国浙江省	中国浙江省	中国系トラッテリア	中国系トラッテリア	温州語	仏教
12	M	20	フランス生	大学生(情報工学)	中国系ラオス	中国系ラオス	運送業社員	パティシエ	潮州語	無
13	M	18	フランス生	高校生	香港	中国系カンボジア	商店店員	主婦	広東語	無
14	F	17	フランス生	高校生	離婚	中国上海	?	洋服店店員	北京語	無
15	F	17	フランス生	高校生	中国系ベトナム	中国系ベトナム	靴修理	経理会社社員	潮州語	仏教
16	F	25	フランス生	エンジニアー	中国浙江省	中国浙江省	中国系トラッテリア	中国系トラッテリア	温州語	無
17	M	24	フランス生	求職中	ラオス	中国系ベトナム	家具屋店員	保母	ベトナム語	無
18	M	25	フランス生	IT 関連会社社員	中国系ラオス	中国系ラオス	両替商	公務員	ラオス語,タイ語	無
19	F	25	フランス生	銀行員	中国系カンボジア	カンボジア	自動車工場	レジ係	カンボジア語	無
20	M	26	フランス生	会計事務所勤務	中国系カンボジア	タイ系ラオス	労働者	車部品工場	父とだけ潮州語	無
21	F	23	フランス生	大学生(中国語)	中国系カンボジア	マカオ	レストラン自営	主婦(離婚)	広東語	無